

# アルゼンチンのピケテールロス運動

廣田 拓



「ひろた、たく」慶応大非常勤講師(社会運動論、比較政治)。1969年、アルゼンチン・ブエノスアイレス生まれ。共著に「グローバル・ナショナル・ローカルの現在」

一九九〇年代、アルゼンチンでは、ペロン党のカルロス・メナム政権が、財政支出の削減、貿易・投資の自由化、国営企業の民営化、補助金のカット、規制緩和など、徹底したネオリベラール(新自由主義)政策を断行した。この政策は、マクロ経済的には、年率3000%を超したハイパーインフレを収束させ、高成長をもたらした。しかし反面で、民営化に伴うリストラや、企業倒産、工場閉鎖が膨大な失業者を生み、貧困層を増大させた。

九〇年代後半に各地で続発した通貨危機の影響で、その経済は失速し、対外債務の返済負担が増加する。アルゼンチン政府は二〇〇一年、債務の支払い停止を表明し、経済は破綻した。政治への不信は募り、既存の政治制度は機能不全に陥つていく。

人びとが幹線道路を封鎖して交通や物流を遮断し、抗議のデモ行進をするこの運動は、国営石油公社の民営化に抗議して九六年六月に南部のニューケン州で、七年四月に北部のサルタ州で起きた民衆蜂起に始まる。失業労働者だけ

でなくその家族や子ども若者が参加し、産業種別を超えた多様な人びとの自発的な運動となってアルゼンチン全土に広がった。首都ブエノスアイレスの五月広場や国会議事堂付近では、現在でも頻りにデモが行われている。

ピケテールロス運動の目的は、第一に、国営企業の民営化や企業の倒産で職を失った人びとが、新自由主義政策への反対を表明し、失業や貧困状態を解消する経済的な保障や権利の回復を

求めることである。そして第二に、自主管理による相互扶助活動や協同組合を通して生活基盤のネットワークを築くことである。運動に加わる住民たちは地域の中で討議し、何が公共の利益なのかを問い、地縁や血縁を越えて共同して行動する。道路封鎖やデモ以外にも、日常的に地道な活動が行われている。例えば、街頭で炊き出し

## 失業、貧困道路封鎖し抗議

た。政党や労働組合は、失業者や貧困層の声をすくい上げることができなかった。こうした背景の中で生まれたのが「ピケテールロス運動」である。

# ピープルの地平へ

## 世界の市場化に抗して

20



文化



アルゼンチンの首都ブエノスアイレスで抗議のデモをするピケテールロス運動の人びと(写真提供:インディペンデント・メディアセンター・アルゼンチン)

アルゼンチンの首都ブエノスアイレスで抗議のデモをするピケテールロス運動の人びと(写真提供:インディペンデント・メディアセンター・アルゼンチン)

求めることである。そして第二に、自主管理による相互扶助活動や協同組合を通して生活基盤のネットワークを築くことである。運動に加わる住民たちは地域の中で討議し、何が公共の利益なのかを問い、地縁や血縁を越えて共同して行動する。道路封鎖やデモ以外にも、日常的に地道な活動が行われている。例えば、街頭で炊き出し

政府が十分な社会政策を講じられない中で、ピケテールロス運動はこうした活動を通して、地域や共同体に根ざしたローカルな公共空間をつくりだしてきた。ある運動組織のメンバーは「われわれは、単に職を得て生存すること以上に、人間としての尊厳を持つて生きることで、自主管理の生存拠点を築くこととして」と語る。

自由主義がもたらしてきた社会格差や貧困を是認する価値観を、ローカルな公共性から問い直す運動と言えらる。その公共空間の中で、人びとは相互に協力し、助け合いながら生きる社会的な紐帯(ちゅうたい)や共同体の中での個人の存在を意識化している。そこに、経済的な弱者や声なき者たちが提起する「公共性のオルタナティブ(代案)」がある。

(今回は23日掲載します)